

「地中海式 人生のレシピ」 ★★★

2013（平成25）年12月10日鑑賞<ビジュアルアーツ
専門学校試写室>

監督：ホアキン・オリストレル
脚本：ホアキン・オリストレル、ヨランダ・ガルシア・セラノ
ソフィア（女性シェフ）／オリビア・モリーナ
トニ（ソフィアの夫・地元の不動産業者）／パコ・レオン
フランク（ソフィアの友人・事業家）／アルフォンソ・パッサベ
ロレン（ソフィアの母）／カルメン・バラゲ
ラモン（ソフィアの父）／ロベルト・アルバレス
ペペ（トニの父）／ヘスス・カステホン
2009年・スペイン映画・100分
配給／Action Inc.

<料理が大好きなら、女性だって一流シェフに！>

和食がユネスコの無形文化遺産に登録されたのは嬉しい限りだが、スペインのバルセロナの海岸に面した小さな町に住む女性ソフィア（オリビア・モリーナ）のオリジナル料理だって、負けてはいないらしい。料理の世界が男の世界であること、また料理人に男性が多いことは世界各国共通だが、近時は女性でも優秀かつ有名なシェフが次々と。それは、フランスのフランソワ・ミッテラン大統領のシェフをつとめたヒロインを主人公にした『大統領の料理人』（12年）を観ても明らかだ（『シネマルーム31』124頁参照）。

食堂を営む父ラモン（ロベルト・アルバレス）と母ロレン（カルメン・バラゲ）の元に生まれたソフィアは、勉強が嫌いで料理が大好きな女の子。そして、8歳の時にはすでに独自に開発したサンドイッチを作って海岸の客に売り始めていたから、すごい。そんな女の子が大人の女性となり、幼なじみの2人の男の子トニ（パコ・レオン）、フランク（アルフォンソ・パッサベ）と「共に」歩む人生とは？本作に見る、「地中海式 人生のレシピ」には、まさにビックリ！

<女1人、男2人のいい関係はいつまで・・・？>

子供時代は女1人、男2人で仲のいい関係を築いていても、年頃になれば結婚する相手の男はどちらか一人にしぼられるのが当然。ところがソフィアは、散髪屋の息子ながら大人になると地元の不動産屋として大成功した堅実派のトニと、女たらしだがソフィアの料理の腕を認め、ソフィアを将来自分が経営するレストランのシェフにしたいと願っているフランクを、どちらか一人にしぼることができないらしい。その結果、ソフィアはトニと婚約しながらも、フランクが持ち込んだある有名シェフの下でのシェフ修行の話に乗っかり、駆け落ち同然の状態でもフランクと2人で町を出ることに。

ところが、そのシェフ修行の内容に不満をもつ一方、自分が妊娠していることがわかると、ソフィアは再び故郷のトニの元へ。そして、1人目の男の子を産んだ後は、更に2人の子供を次々と産んだから、何ともお盛んなものだ。トニの不動産屋の仕事は順調で、2人が住んでいる大邸宅は子供の頃は想像もできなかったもの。したがって、ここまでくればもはやフランクは「過去の男」。誰もが、そう思ったが・・・。

<性懲りもなく、再びシェフ修行に！今度はさて？>

『されど われらが日々』で1964年（第51回）の芥川賞を受賞した作家・柴田翔の2作目の『十年の後』は、学生運動を体験した学生たちの、大学を卒業した10年後のそれぞれの姿を描いた面白い小説だった。それを考えると、シェフ修行のためのフランクとの故郷からの失踪劇から約10年を経たソフィアは、今やトニと3人の子供たちに囲まれながら幸せな「主婦」生活にドブプリ！日本の女性ならみんなそうだろうが、スペインのバルセロナの女、とりわけソフィアのような女は全く違うらしい。つまり、安定した生活を営むトニとは正反対に、今なおレストラン経営の夢を持ち続けるフランクが、3人目の子供の洗礼式の日にも再度登場し、「お前を一流のシェフにしてやる」と吹き込まれると、もうダメ。再び、駆け落ち同然の状態でもフランクと共に故郷を後にしようとしたが、何と今度は2人の「子連れ」でというから恐れ入る。「いくらなんでもそれは無理！」とフランクは子連れは拒否したが、そこにトニが登場すると、ハチャメチャな状況下、ストーリーはあっと驚く展開へ！

深くソフィアを愛すると同時に、シェフになりたいというソフィアの夢をよく理解しているトニは、何とここで、「自分とフランクの2人で子育てをするから、ソフィアはシェフ修行に行けばいい」と心良くソフィアを送り出したのだ。ここまでくれば、男女同権をはるかに越えた女権優位の世界だが、ホントにスペインにはトニのような男がいるの？こんなストーリー展開になってからは、私の目に本作は、『大統領の料理人』のようなサクセスストーリーではなく、ハチャメチャなマンガの世界に・・・。

<妻妾同衾は知っているが・・・>

亡くなった山崎豊子の小説はどれも面白いが、私には『華麗なる一族』がトップ。その中では14代目当主・万俣大介が、自宅で妻と愛人を同居させる、「妻妾同衾」の様子が描かれていた。しかして、本作後半からは、ソフィアがトニとフランクと共にベッドに入る姿が描かれる。目覚めた時には素っ裸だから、さて夜な夜なこの3人は何をしていたの？

こんなことができるのは、料理の腕をみがいて故郷へ戻ってきたソフィアを料理長とするレストラン「ソフィア」が大ヒットしたからだ。資金を出したのはトニ。店を切り盛りしたのはフランク。料理を作るのはソフィア。そういう役割分担だが、3人の連携は昼間の仕事のみならず、3人の子育てや男女の夜な夜なの営みまでバッチリというから恐れ入る。しかし、いつもソフィアの両隣にトニとフランクの2人がいれば、次第に周りの人たちが怪訝そうな目でこれを見始めるのは当然。その都度3人はそんな視線をうまくかわしながらレストランを運営し、妻妾同衾ならぬ、女1人男2人でベッドを共有する生活を続けていたが・・・。

<フランクの立場は？その安定は？>

最近、同性愛をカミングアウトするニュースが増えているが、あなたは大阪弁護士会にも同性愛（ゲイ）の弁護士がいることを知ってる？それは、「なんもり法律事務所」を共同経営している吉田昌史弁護士と南和行弁護士だ。彼らは私生活でも同性のパートナーで、2011年4月9日に「結婚式」を挙げている。彼らは「同性愛者（ゲイ）であることを公にすることで、同性愛者の存在が決して隠されるべきではないことを社会に伝えたいと考えている」そうだ。なるほど、なるほど。

こんな話を聞くと、時代は大きくサマ変わりしていることを痛感するが、ソフィアはトニと正式に結婚している妻と夫だから、そのベッドの上にソフィアを真ん中としてもう一人の男フランクが寝ているのはどう考えても異常では？少なくとも、法的にはフランクには何の保証もないうえ、ラスト近くになってフランクが声高に訴えるように、トニとソフィアには夫と妻、またその子供たちの父親、母親という自分の立場があるが、フランクには何の安定した立場もないことになる。そんなフランクの「立場の安定」は・・・？

<あっと驚くカミングアウト！これで気が晴れ晴れと>

今日はソフィアが教えたシェフたちを一堂に会した盛大なパーティーが開かれる日。その日のためにトニは一大サプライズを用意していたが、折悪しくそんな日に、フランクがソフィアに対して、「別れざるをえない」とダダをこねだした（？）から大変だ。ソフィアは何とかそれを収めようとしたが、そこで「あなたには自分の安定した立場がないというけど、もし1人の子の父親があなただったら・・・」というあっと驚く重大発言が・・・。なるほど自分の子の父親は誰かをホントに知っているのは母親だけということだ。

本作ラストに展開されるそんなこんなの「ドタバタ劇」は、法的にも、道徳的にも如何なもの？私にはそう思わざるをえないことだらけだが、あくまでも陽気で明るいバルセロナの海岸で生まれ育った太陽のような女性ソフィアならば、それは許されるのかも・・・？そんな「ドタバタ劇」の後は、「同性愛」ならぬ「3人の男女関係」のカミングアウトだ。ソフィアを真ん中に、トニとフランクが抱き合いキスを交わす姿は晴れ晴れとしていたが、さてそれを見ている私やあなたは・・・？